

香取神宮の森に刻まれた歴史 —発掘調査の成果から—

平野 功

1 はじめに

(1) 香取神宮遺跡の調査時期と講演会場の神徳館について

- 平成20～24年度に実施、
- 「神徳館」は、香取神宮神職の最高位にあった旧大宮司家の邸宅跡。

表門は、天明元年(1781)の建立で、神宮で唯一の茅葺の施設。香取市指定文化財で平成29.30年度に保存修理工事が実施された。 ⇒【1-0：神徳館表門】

2 香取神宮遺跡の発掘調査

(1) 香取神宮の歴史と社殿

⇒【1-1：現拝殿／1-2：本殿／1-3：旧拝殿／1-4：楼門】

- 香取神宮は『日本書紀』にも記録された歴史ある神社。
- 本殿、旧拝殿、楼門は、5代将軍徳川綱吉が元禄13年(1700)に造営。

(2) 香取神宮の過去の調査

- 明治20年代の後半には、縄文時代の遺跡として周知。
- 最初の発掘調査は、明治42年(1909)4月、考古小説家として知られたに江見水蔭が禰宜職にあつた伊藤泰歳の協力を得て行った香取神宮西側斜面の貝塚調査。明治10年代後半の迅速図から「香取の海」がイメージされる。 ⇒【1-5：香取の海のイメージ】
- 混土貝層を2m程掘り下げるとその下に薄い貝層があり、縄文時代中期から後期の浅鉢・鉢形土器や土偶を検出。 ⇒【1-6：明治42年 香取神宮の発掘調査風景】

(3) 現在の香取神宮遺跡 集落跡で縄文、古墳、飛鳥、奈良・平安、中世、近世の複合遺跡。

(4) 調査概要と目的

- 平成20年度から24年度の5ヶ年で、129㎡の発掘調査を行った。
- 目的は、遺跡の年代や性格、遺構の拡がりの確認。具体的には平安時代以降の20年を式年とする遷宮に関する遺構や奈良・平安時代の竪穴住居跡の存在の有無など。

(5) 周辺の遺跡

⇒【2-1：香取神宮周辺の遺跡分布】

- 周辺の遺跡として、多田寺台遺跡・多田日向遺跡・吉原三王遺跡・織幡妙見堂遺跡など。
- 香取神宮周辺の集落は、7世紀後半から8世紀頃に成立し、9世紀代へ継続し、集落内寺院という小規模なお堂などを伴うものが多い。
- 特徴的な墨書土器に多田寺台遺跡の神仏習合を示す「赤祝連國刀自寺」、吉原三王遺跡の文書様式「口

香取郡大坏郷中臣人成女之替承口」など。

3 検出された遺構と遺物

(1) 調査の概要

⇒【2-2：調査地周辺地形図／2-3：トレンチ配置図・主要部全体図】

- ・調査は図面に示したように社殿の西側に9本のトレンチを設定して実施。

(2) 主要な遺構

① 縄文時代の遺構と遺物

⇒【3-1：9 トレンチ】

- ・9トレンチで検出された小竪穴(SK-3)は中期後半の加曾利 E 式期、掘立柱建物跡(SB-1)は切り合いから小竪穴より新しい。
- ・遺物としては、中期から晩期の縄文土器（近世の整地のために搬入された客土に含まれていた）、磨製石斧・石皿などの石器類、土偶・土錘など。

② 古墳時代の遺構と遺物

⇒【3-2：5 トレンチ】

- ・5トレンチの竪穴住居跡(6世紀前半)と9トレンチの土坑(5世紀後半)。
- ・竪穴住居跡から坏・椀・甕・甑などの土師器と土製支脚、土坑から坏などの土師器、その他では石製模造品や土玉など。

③ 奈良時代の遺構と遺物

⇒【3-3：7トレンチ①】

- ・7トレンチの掘立柱建物跡 1(SB-1)と掘立柱建物跡 2(SB-2)の 2 棟、これらは性格の異なる建物だが、軸が揃えられていることから同時期の所産。
- ・掘立柱建物跡 1 は、一辺約 1 m の隅丸方形の柱穴が 3 基、柱穴の間隔は芯々間 1.9 m、深さは 0.7～1 m。柱痕跡は直径 30 cm 前後で、この遺構は神社の主要な構造物。
- ・掘立柱建物跡 2 は一辺約 0.9 m の隅丸方形で向きも揃えられた柱穴が 4 基、柱痕跡は直径 30 cm 前後、長軸芯々間で 2.4 m、短軸芯々間で 1.5 m。回廊のような構造的。

⇒【3-4：7トレンチ②】

④ 中世の遺構と遺物

⇒【4-1：1・4 トレンチ（写真）／4-2：4・6 トレンチ（実測図）】

- ・「掘込地業Ⅰ」が 1、4 トレンチで検出。掘込地業は区域を限って地山を削平して新たな土砂を互層に入れ、整地を行うという大規模な造営工事の痕跡で、礎石建物のための土木工事跡。
- ・遺物は小型坏・柱状高台付杯などの出土。

⑤ 近世の遺構と遺物

⇒【4-3：6 トレンチ（写真）】

- ・「掘込地業Ⅱ」が、4、6 トレンチで検出。約 1.8 m にも及ぶ竪坑で、江戸時代に描かれた絵図の建物配置や埋土下層から出土した陶磁器やかかわらけ、元禄 13 年(1700)に新たに造り替えられた愛染堂という仏教施設跡と推察。

⇒【4-4：江戸時代の香取神宮境内絵図】

4 調査の成果と課題

(1) 調査の成果

- ・香取神宮の境内地は、元来は多少の起伏地形があり、後世の整備で平坦となっていること、遺構や遺構確認面までの深さが想定を超えるものであったこと、遷宮などの造替に付帯した大規模な工事が幾度もなされていたこと、遺構に伴う遺物が少ないこと、奈良時代には既に神域化された空間であっただけのことなど。

(2) 今後の課題

- ・掘立柱建物の規模や性格をより明確に捉えることが必要。

5 掘立柱建物についての参考資料

(1) 「正神殿」と「アサメ殿」

- ・式年遷宮よりも数年前に造られる仮殿を「アサメ殿」、この施設にご神体を遷して、もとの正神殿を取り壊し、新たな正神殿が20年ごとに造られていた。
- ・平安時代から鎌倉時代には、正神殿などの諸施設の造営は、概ね着実に実行されたが、元徳2年(1330)の正遷宮が最後で、その後は一回り規模の小さい、アサメ殿様式を維持する状況にあった。

(2) 「香取明神祭礼図」(多田家本)

⇒【5-1：香取神宮絵巻に見る正神殿】

- ・建仁2年(1202)時の正神殿で、桁行5間・梁間3間の平入切妻造で檜皮葺、正面中央の間は壁でその左右に朱塗の扉が2か所、柱毎に1つの龍頭(計16頭)が取付けられ、屋根は瓦木の上に「人」形の堅魚木4本をのせ、さらに2羽の鳳凰、瓦木の両端を鬼板で整えた礎石建物。その前には内院中門、更にその前に桁行5間の渡殿がある。

(3) 「香取神宮境内古絵図」・「香取神宮神幸祭絵巻」(旧大禰宜家) ⇒【5-2：香取神宮境内古絵図】

- ・ともに元禄13年(1700)頃に描かれたもので、「アサメ殿」様式の構造。正面3間に戸口が1か所、側面2間の母屋と背面1間通りの庇で構成され、この庇に神座を安置。屋根に鳳凰あるが、装飾性が乏しく質素なものに変化。礎石建物。 ⇒【5-3：香取神宮境内古絵図に見る正神殿】

(4) 現在の正神殿(元禄13年)

⇒【5-4：香取神宮本殿実測図／5-5：国宝 海獣葡萄鏡】

- ・8尺にも及ぶ地業を行い、切石を積んで土台を廻らして建立された「アサメ殿」様式の正神殿。
- ・構造は前面の庇を取込んだ3間社流造、背面にも出の短い庇を設け、ここに神座が置かれる。
- ・3間社流造としては、国内でも最大級の規模、神座で伝世されてきたのが、現在の国宝となっている海獣葡萄鏡。この鏡と同様のものが奈良の正倉院にも伝わっており、古代における藤原氏と香取神宮の深い関係を裏付ける貴重で重要な資料。